

エメ・セゼールにおけるネグリチュードの 意識の誕生

——『祖国復帰ノート』解釈の試み¹⁾——

砂 野 幸 稔

Notre mission historique, à nous qui avons pris la décision de briser les
reins du colonialisme est d'ordonner toutes les révoltes, tous les actes
désespérés, toutes les tentatives avortées ou noyées dans le sang.

— Frantz Fanon²⁾

〔はじめに〕

ネグリチュード (Négritude) という語が、ある限られたサークルの隠語であることをやめ、普通名詞としてフランス語のなかに市民権を獲得するに到ったのは、1948年、L. S. サンゴールによってフランス語で書く黒人詩人たちの作品が、*Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*³⁾に編まれ、サルトルがその序文として有名な『黒いオルフェ⁴⁾』を書いた時のことである。それ以後、サンゴールがネグリチュードの旗手となった。そして、1960年の独立とともにセネガル大統領となり、21年間その座にあったサンゴールの喧伝によって、ネグリチュードは、今ではひとつの政治的イデオロギーを指示する名辞となっているのである。⁵⁾

ところで、ネグリチュードという語を生み出したのは、1930年代にパリに集まっていた植民地出身の黒人学生たちであった。そして、その時中心的役割を果たしたのがサンゴールとセゼールである。しかし、一貫してネグリチュードの旗手をつとめたサンゴールと異なり、セゼールは『祖国復帰ノート』発表以後ほとんどネグリチュードについては語っていない。それどころかセゼールは、現在ではサンゴールによって喧伝されたネグリチュードに対して厳しい批判の姿勢を示しているのである。⁶⁾

このことから、現在の二人のネグリチュードに対する姿勢が根本的に異なることは明らかである。しかしそれは我々を新たな問いに導く。すなわち、この二人の相違は、ネグリチュードの意識が誕生した時点ですでに存在していたものではないか、という問いである。以下はこの問いに答えるために、まずセゼールにおけるネグリチュードの意識の誕生を、その最初の長詩『祖国復帰ノート』の解釈を通じてつかみ取り、明るみに出そうとするものである。

なお本稿は、1978年に京都大学に提出した卒業論文に若干の加筆修正を行なったものである。

0. 序論—背景

ヨーロッパはただ黒人を奴隷化し、経済的に搾取しただけではない。ヨーロッパは、黒人を劣等種族として植民地化し奴隷化したのである。白人は状況を正当化し固定化するために、黒人の人間存在としてのリアリティーを變形させた。黒人は固有の言語と文化を剝奪され、あるいは否定され、自らの劣等性を信じさせられた。彼らは、自ら進んで奴隷として自分を規定し働くように、白人によってつくりあげられたのだ。

黒人：わたし出来ませんね、奥さん。

リッジー：ええ？

黒人：わたし、白人、射てないね。

リッジー：ほんとにまあ！ 向う様で恐れ入っちゃうわ。

黒人：だって白人でな、奥さん。

リッジー：それがどうしたの？ 白人だからって、あんたを豚みたいにして、血だらけにして殺す権利があるっていうの？

黒人：白人でな。⁷⁾

そして白人のステレオタイプと黒人のステレオタイプが存在する。白人であることは、絶対的真理であり、善であり、美であることであり、黒人であることは、価値の否定であり、暗黒そのものである。このような「マニ教的善悪二元論⁸⁾」の上に立って、白人文明は黒人の暗黒に光をあてる者として自らを認めさせようとする。

ファノンと言う。

植民地主義が意識的に追求したその結果とは、コロンの退去が現地人にとって、野蛮への復帰、墮落、動物化を意味するということを、彼らの頭にたたきこむことであった。⁹⁾

フランスの植民地においては、この「文明化の使命 (mission civilisatrice) を帯びた白人」の役割は特に巧みな瞞着をもって演出された。¹⁰⁾ フランスは植民地のエリートに同化教育を与え、たとえ黒人であっても、フランス語を学びフランス文化を自分のものにしさえすれば、フランスのいかなる地位につくことも名目的に許した。フランスは植民地に学校を建て、半人間の段階にとどまっている植民地エリートを人間の水準に引き上げてやるために、「完璧」なフランス語を教えこみ、フランス文化をたたきこんだ。フランスのこのおめでたいナルシスムは黒人に実存の屈折を押しつけた。喜び勇んで「本国」フランスに着いた植民地出身の黒人エリートにとって、事態は衝撃としてあらわれる。

「ニグロ野郎！」あるいは単に、「ほら、ニグロだ！」。私は事物に意味を担わせるつもりでこの世界に生まれて来たのであった。私の心は世界の根源に到達したいという欲求に充ち溢れていた。ところが私は他の数多くのもののうちのひとつにすぎぬ自分を発見したのだ。¹¹⁾

この「マニ教的善悪二元論」の植民地世界において、フランス文化を自分のものにすることが人間となることを意味するならば、「人間」になろうとする「半人間」＝黒人が、どうしてそれまで自分が属していた文化を嫌悪し、放棄しないわけがあるろう。自らの文化を否定し西欧に同化した黒人のもつ世界観は白人の世界観である。しかし、その白人の世界観、彼らの価値体系は実は人種差別的なものであり、そのような世界観のなかでは、彼がそうであるところの黒人は、普遍的な人間として、すなわち認識の主体として存在するのではなく、そのような主体の外側で対象化されるものとして存在するのである。

ネグリチュードの意識は、このような黒人の状況に対するアンチテーゼとしてあ

らわれた。

植民地出身のエリート、同化されたエリートは、自らを白人と同じものと見なすことによってしか自らのアイデンティティを見出すことができない。しかし、今、このアイデンティティは白人の視線に会うことによってこなごなに碎け散った。自己のアイデンティティを再び見出すためには、このような白人文明に規定されず、その外側に存在する新たな価値を見出さねばならない。

かくしてセゼールの意識の歩みが始まる。

我々は、この詩を、セゼールの意識の流れの変化に従って、導入の部分および7つの小部分に分け、各部分についての考察を行なった後、それらの考察によって明らかになったセゼールのネグリチュードの種差性を指摘する。

1. 導入の部分——予感¹²⁾

Au bout du petit matin...¹³⁾

これは夜明けの薄明のなかで、今、まさに太陽が水平線から顔を出さんとしている時である。セゼールは、今がまさしくその時であると感じている。植民地主義の時代は終わりを告げねばならない。

導入の部分は、この長詩の中心となるテーマを予告する。——闇のなかで、セゼールはすでに予感していたのだ。

彼は拒否の姿勢を宣言するだろう。

Va-t'en, lui disais-je, gueule de flic, gueule de vache, va-t'en je déteste les larbins de l'ordre et les hannetons de l'espérance. Va-t'en mauvais gris-gris, punaise de moinillon.¹⁴⁾

拒絶の対象は、黒人存在のリアリティーを歪曲する現在の秩序——価値の秩序——であり、その秩序にしがみつくもの、その秩序のなかにこそ希望があるという瞞着を用いるもの、現実から目をそらすことにしか役立たない盲信——この価値の秩序を存続せしめている全てのものである。そしてそれは、同時にセゼール自身の内に

ある卑屈さに対する拒絶である。

ついで彼は、解き放たれた自己の内に新しい思想が存在することを知るだろう。

Puis je me tournais vers des paradis pour lui et les siens perdus, plus calme que la face d'une femme qui ment, et là, bercé par les effluves d'une pensée jamais lasse je nourrissais le vent, je délaçais les monstres et j'entendais monter de l'autre côté du désastre, un fleuve de tourterelles et de trèfles de la savane que je porte toujours dans mes profondeurs à hauteur inverse du vingtième étage des maisons les plus insolentes et par précaution conte la force putréfiante des ambiances crépusculaires, arpentée nuit et jour d'un sacré soleil vénérien.¹⁵⁾

黒人存在は悲惨のみによって特徴づけられるものではなく、ある豊饒なる資質をそなえているのである。深淵から上昇してくる ≪un fleuve de tourterelles et de trèfles de la savane≫ のイメージがこの長詩の軸をなす。それは、セゼールの意識のうちに一瞬にしてかたちづくられた、新しい事態を予感させるイメージであり、これを受けてセゼールがなすべきことは、このイメージに現実を負わせることによって、世界の現実のなかでこのイメージを展開させることである。

2. 第一の部分——下降¹⁶⁾

セゼールの意識はアンティル諸島に向かって下降してゆく。アンティル諸島はセゼールが生まれ育ったところであり、その記憶は消し去り難いものとして彼のうちを満たしている。

ここではまず、停滞、腐敗のイメージが支配的である。

Au bout du petit matin bourgeonnant d'anses frêles les Antilles qui ont faim, les Antilles grêlées de petite vérole, les Antilles dynamitées d'alcool, échouées dans la boue de cette baie, dans la poussière de cette ville sinistrement échouées.¹⁷⁾

アンティル諸島は未来もなく座礁している。そして、

Au bout du petit matin, l'extrême, trompeuse désolée eschare sur la blessure des eaux; les martyrs qui ne témoignent pas; les fleurs du sang qui se fanent et s'éparpillent dans le vent inutile comme des cris de perroquets babillards; une vieille vie menteusement souriante, ses lèvres ouvertes d'angoisses désaffectées; une vieille misère pourrissant sous le soleil, silencieusement; un vieux silence crevant de pustules tièdes, l'affreuse inanité de notre raison d'être.¹⁸⁾

そこには植民地主義によって搾取され、疎外され、あらゆる人間的なものを剝奪された民衆がいる。植民地主義によってつけられた傷跡は全島をおおう。それはさながら、カリブ海にぐさりと切り込んだ植民地主義の巨大なナイフの傷跡とさえ思える。しかし、その傷跡はなまなましくその赤い肉をさらしているのではない。それは「荒れはてたかさぶた (désolée eschare)」となって、全ての悲惨と矛盾は「なまぬるい膿疱 (pustules tièdes)」のうちに包み込まれてしまっているのである。

セゼールの意識は、地球儀を見おろすようにして、上空のはるか彼方からカリブ海を見おろしている。カリブ海につけられた植民地主義の傷跡のかかさぶたのなかでは、目に見えぬ苦悩がどんよりとよどんでいる。まだそこからは何も聞こえてこない。それらの悲惨と苦悩は、腐ったたまり水のようにして、腐臭を放ちながら停滞しているのだ。

セゼールの意識はさらにアンティル諸島に近ずき、マルチニックの上においてゆく。マルチニックは彼が生れ育った島である。彼の意識は感覚する中心となってマルチニックの上をさまよう。植民地主義がその民衆にもたらした影響は、さまざまな形でいたるところに影をおとしている。そのイメージがつぎつぎとセゼールの意識のうちにあらわれてくる。

Au bout du petit matin, cette ville plate — étalée, trébuchée de son bon sens, inerte, essoufflée sous son fardeau géométrique de croix éternellement recommençante, indocile à son sort, muette, contrainée de toutes façons, incapable de croître selon le suc de cette terre, embarrassée, rognée, réduite, en rupture de faune et de flore.¹⁹⁾

平らにひろがったフォール・ド・フランスの町におりたつたセゼールの意識が感覚するのは、押しつけられたヨーロッパ的価値観のために、本来のごく自然な人間と

しての発現を否定され、人間存在としてのリアリティを歪曲された民衆のおちいつている無気力である。彼らはもはや「大地の汁によって成長することができない (incapable de croître selon le suc de cette terre)」。

うちのめされた彼らは、悲惨から苦悩から身进行かわし、逃避するだけだ。彼らは分断され、そのために真につながりあうことはなく、共通の苦悩は確認されることはない。

une faim lourde et veule,²⁰⁾

そして「飢え」がある。経済的搾取。暴力的な搾取は植民地の民衆の生命力まで奪ってしまう。このようにして民衆が追い込まれた無気力、停滞は、恐るべき腐敗を生み出す。

Au bout du petit matin, l'échouage hétéroclite, les planteurs exacerbés de la corruption, les sodomies monstrueuses de l'hostie et du victimaire, les coltis infranchissables du préjugé et de la sottise, les prostitutions, les hypocrisies, les lubricités, les trahisons, les mensonges, les faux, les concussions—l'essoufflement des lâchetés insuffisantes, l'enthousiasme sans ahan aux poussis surnuméraires, les avidités, les hystéries, les perversions, les arlequinades de la misère, les estropiements, les purits, les urticaires, les hamacs tièdes de la dégénérescence.²¹⁾

植民地権力に対する恐怖は、民衆をして彼らにこびへつらわせ、民衆のその卑屈さはセゼールの目には「異様な男色(sodomies monstrueuses)」として映る。そして町は「その抗議の身がまえによって空をつらぬこうなどとは決して思わず (sans jamais aucune envie de vriller le ciel d'une stature de protestation)²²⁾」、食欲と下劣さのなかにうずくまっているだけだ。

さらに、セゼールの自らの貧困の記憶がある。貧困のなかでの絶望的なやりきれなさの記憶は、セゼールのうえに重苦しくのしかかる。セゼールの意識はさらに下降をつづけ、町の中の一軒の小屋に近づいてゆく。それは彼の生まれ育った家だ。

Au bout du petit matin, au-delà de mon père, de ma mère, la case gerçant d'ampoules, comme un pêcher tourmenté de la cloque, et le toit

aminci, rapiécé de morceaux de bidon de pétrole, et ça fait des marais de rouillure dans la pâte grise sordide empuantie de la paille, et quand le vent siffle, ces disparates font bizarre le bruit, comme un crépitement de friture d'abord, puis comme un tison que l'on plonge dans l'eau avec la fumée des brindilles qui s'envole... Et le lit de planches d'où s'est levée ma race, tout entière ma race de ce lit de planches, avec ses pattes de caisses de Kérosine, comme s'il avait l'éléphantiasis le lit, et sa peau de cabri, et ses feuilles de banane séchées, et ses hailons, une nostalgie de matelas le lit de ma grand-mère (Au-dessus du lit, dans un pot plein d'huile un lumignon dont la flamme danse comme un gros ravet... sur le pot en lettres d'or : MERCI).²³⁾

イマージュは生々しい。貧困は可能性を奪う。そのなかでは彼らは自らを生かしつづけるだけで全エネルギーを費さねばならない。あとに残るのは、ぼろぼろにひからびた生活だけであり、彼らにできることは、それでもなおキリストの慈愛を信じつづけることで救いを見出すことだけである。

この重苦しい停滞と腐敗のイマージュは、しかし同時に自らの否定を内包している。それは、セゼールのうちでぶすぶすとくすぶる怒りであり、さらに、彼が民衆のうちに予感する自己の現状を拒否しようとする欲求である。

それらは次のような形であられる。

まず第一に、それぞれのイマージュが否定形で、あるいは価値の否定をあらわす言葉で語られることによって、そのイマージュの不安定さから本来あるべき形を求める運動が起こる場合である。次のようなイマージュにおいてそれは顕著である。

Dans cette ville inerte, cette foule désolée sous le soleil, ne participant à rien de ce qui s'exprime, s'affirme, se libère au grand jour de cette terre sienne. Ni à l'impératrice Joséphine des Français rêvant très haut au-dessus de la négaille. Ni au libérateur figé dans sa libération de pierre blanchie. Ni au conquistador. Ni à ce mépris, ni à cette liberté, ni à cette audace.²⁴⁾

第二に、未来形によって直接爆発の、あるいは浄化の予感が語られる場合である。

Au bout du petit matin, sur cette plus fragile épaisseur de terre que dépasse de façon humiliante son grandiose avenir — les volcans éclateront, l'eau nue emportera les taches mûres du soleil et il ne restera plus qu'un bouillonnement tiède picoré d'oiseaux marins — la plage des songes et l'insensé réveil. 25)

そしてまた、

Une détresse cette plage elle aussi, avec ses tas d'ordure pourrissant, ses croupes furtives qui se soulagent, et le sable est noir, funèbre, on n'a jamais vu un sable si noir, et l'écume glisse dessus en glapissant, et la mer la frappe à grands coups de boxe, ou plutôt la mer est un gros chien qui lèche et mord la plage aux jarrets, et à force de la mordre elle finira par la dévorer, bien sûr, la plage et la rue Paille avec. 26)

第三には、群集のうちにセゼールが予感する、叫ばれるべき飢えの、悲惨の、憎悪の叫び、そして爆発寸前の鬱積したエネルギーのイマージュである。それはたとえば次のようなイマージュのなかに見出せる。

Au bout du petit matin, l'incendie contenu du morne, comme un sanglot que l'on a bâillonné au bord de son éclatement sanguinaire, en quête d'une ignition qui se dérobe et se méconnaît. 27)

そして第四に、現実から逃避しようとする動きのなかにも、そのようなエネルギーは認められる。

ひとつはヴォードゥ教の儀式を思わせるイマージュである。

le bulbe tératique de la nuit, germé de nos bassesses et de nos renoncements.

Et nos gestes imbéciles et fous pour faire revivre l'éclaboussement d'or des instants favorisés, le cordon ombilical restitué à sa splendeur fragile, le pain, et le vin de la complicité, le pain, le vin, le sang des épousailles véridiques.²⁸⁾

アフリカの栄光の過去、アフリカの源泉に自らを結びつけようとする欲求は、自覚的なものではなく「我々の下劣さと放棄から発芽した (*gémé de nos bassesses et de nos renoncements*)」ものにすぎないが、「愚かさ」と「狂気」の喚起するイマージュの否定のエネルギーは強力である。なぜならそれは、彼らを支配し、抑圧するヨーロッパ的価値規範に対抗する勢力となり得るからである。

さらにもうひとつは、クリスマスにおける民衆の興奮、そして上昇のイマージュである (p 45ℓ2～p 49ℓ24)。民衆の悲惨、苦悩はクリスマスによって昇華されようとする。それは熱狂による逃避だ。しかし、クリスマスが「熟しすぎたざくろのように (*comme une grenade trop mûre*)」黒人小屋の生活を破裂させ、彼らの鬱積した悲惨と苦悩がたばねられ、ひとつの塊となって上昇するとき、その上昇に感じられるエネルギーは圧倒する力を持っている。

これら二つのイマージュは、未だ方向を見出していない、現状を否定しようとする欲求を内包しているのである。

第一の部分における、押さえつけられた現状を否定しようとするエネルギーは強烈である。マルチニックの現実においてゆくことによってセゼールが引き出し、たたきつけるこのエネルギーが、この詩全体を展開させ、この現実を未来に向かわせるダイナマイトとなるのである。

3. 第二の部分——被抑圧者³⁰⁾

Partir.³¹⁾

出発する——これは、セゼールの意識の、このマルチニックの現実から世界に向けての出発である。彼は普遍性の次元に到ることによって全てに解決をもたらし得ると考えている。マルチニックの黒人達の悲惨は、世界のさまざまな悲惨のなかで

基本的には等価なひとつの悲慘であり、解決は世界的規模の解決と平行してもたらされるであろう。セゼールは世界の人間達を二種類にわけた。

Comme il y a des hommes-hyènes et des
hommes-panthères, je serais un homme-juif
un homme-cafre
un homme-hindou-de-Calcutta
un homme-de-Harlem-qui-ne-vote-pas³²⁾

つまり、抑圧する、搾取する人間と、抑圧され、搾取される人間である。セゼールは被抑圧者に自己同一する。彼は解決のための公式を見出したと信じるのだ。被抑圧者解放の思想は世界の悲慘を解決する思想であり、それ故にマルチニクの黒人のかかえる問題も思想の普遍性のうちに解消されるだろうということだ。なぜか？それは当然のことだ。なぜなら皆、同じ「人間」だからだ。セゼールは連帯を信じる。

Je retrouverais le secret des grandes communications et des grandes combustions.³³⁾

この思想のうちに身をおくことによってセゼールの心は高揚する。そして普遍的な「人間」として自らがこの思想を担い得ると信じるセゼールは叫ぶ。

Qui ne me comprendrait pas ne comprendrait pas davantage le rugissement du tigre.³⁴⁾

さらにこの思想の普遍性は、アフリカで獣のようにして狩り出された彼らの奴隷としての過去をもひきうけるだろう。祖霊達に向って、そして幻想のアフリカに向けて彼は宣言することができる。

j'aurais des mots assez vastes pour vous contenir³⁵⁾

そしてセゼールは、この普遍性の次元における世界解釈をたずさえて、マルチニ

クに向けての出発を決意する。

Partir. Mon coeur bruissait de générosités emphatiques. Partir... j'arriverais lisse et jeune dans ce pays mien et je dirais à ce pay dont le limon entre dans la composition de ma chair : (J'ai longemps erré et je reviens vers la hideur désertée de vos plaies.)³⁶⁾

彼は解放の思想を持って救済者として島に帰るのだ。彼は、マルチニックの未来を普遍的な「人間」の未来のうちに見出せると考えている。それ故、彼の言葉は一般的な被抑圧者に向けられた言葉である。

(Ma bouche sera la bouche des malheurs qui n'ont point de bouche, ma voix, la liberté de celles qui s'affaissent au cachot du désespoir.)³⁷⁾

しかし失敗は決定的である。

Et voici que je suis venu!

De nouveau cette vie clopinante devant moi, non pas cette vie, cette mort, cette mort sans sens ni pitié, cette mort où la grandeur piteusement échoue, l'éclatante petitesse de cette mort, cette mort qui clopine de petitesse en petitesse; ces pelletées de petites avidités sur le conquistador; ces pelletées de petits larbins sur le grand sauvage, ces pelletées de petites âmes sur le Caraïbe aux trois âmes,³⁸⁾

マルチニックの現実の前におり立つと、彼の「知性の普遍的次元における理解³⁹⁾」は具体性の前にこなごなにくずれ去る。彼の前にいるのは怒りの叫びを上げる民衆ではない。誇りをもって立ち上がる民衆ではない。彼の前にいるのは、無気力で、自らの人間としての尊厳などまるで自覚せず、征服者のまわりにむらがり集まる「無数の矮小な食欲(ces pelletées de petites avidités)」, こびへつらう「無数のちっぽけな征僕達(ces pelletées de petits larbins)」そして「無数のちっぽけな魂(ces pelletées de petites âme)」でしかないのだ。この現実の前に彼の思想は無力である。

et moi seul, brusqué scène de ce petit matin où fait le beau l'apocalypse
des monstres puis, chavirée, se tait ⁴⁰⁾

白人も黒人も同じ人間であるとする「理性の勝利は実存の諸問題を解決しない⁴¹⁾」からである。劣等種族として奴隷化され、その人間存在としてのリアリティーを歪曲された彼らの現実とは、決して脱色され得るものではないのだ。セゼールは理解する。

— Encore une objection! une seule, mais de grâce une seule: je n'ai pas le droit de calculer la vie à mon empan fuligineux; ⁴²⁾

黒人の過去の特殊性が生み出す問題を普遍化することはできない。普遍的な人間について語る前に、まず自分達の立場の特殊性から出発しなければならないのである。

4. 第三の部分——幻想のアフリカ⁴³⁾

第二の部分における失敗にひきつづいて、この第三の部分においてもセゼールはマルチニックの未来を見出すことに失敗する。彼は幻想のアフリカのイメージにおぼれ、マルチニックの未来をアフリカの栄光の過去に結びつけてしまおうとして失敗するのである。しかし、この部分の長さは、セゼールがいかに激しくこの過去におぼれてしまおうとしたかを示している。

第二の部分で止揚された問題意識をうけて、自己の民族の立場の特殊性を認識したセゼールは、自らと共通の歴史を担い、共通の運命のうちにある黒人ディアスポラのうちに自己の位置を見出す。

Ce qui est à moi, ces quelques milliers de mortifiés qui tournent en rond dans la calebasse d'une île et ce qui est à moi aussi, l'archipel arqué comme le désir inquiet de se nier, [...] Et mon île non-clôture, sa claire

audace debout à l'arrière de cette polynésie, devant elle, la Guadeloupe fendue en deux de sa raie dorsale et de même misère que nous, Haïti où la négritude se mit debout pour la première fois et dit qu'elle croyait à son humanité et la comique petite queue de la Floride où d'un nègre s'achève la strangulation, et l'Afrique gigantesquement chenillant jusqu'au pied hispanique de l'Europe, sa nudité où la Mort fauche à larges andains⁴⁴).

セゼールの視線はまずカリブ海のうえに注がれている。そこには奴隷貿易によってアフリカから引きはがされ、奴隷化され、植民地化された彼の同胞がいる。しかし、カリブ海に散らばるアンティル諸島が彼に与えるイメージは、今度は第一の部分におけるような停滞と腐敗のイメージではない。セゼールは、そこに、よりはっきりと未来に向かおうとする運動を感じている。彼の島マルチニックは「この群島の船尾に立ち上がるはっきりとした大胆さ(sa claire audace debout à l'arrière de cette polynésie)」を持ち、ハイチは、かつて「ネグリチュードがはじめて立ち上がった(la négritude se mit debout pour la première fois)」ところである。⁴⁵⁾

そして世界のうちにおける彼ら黒人ディアスポラの位置は決して恥ずべきものではない、とセゼールは言う。

Et je me dis Bordeaux et Nantes et Liverpool
et New-York et San-Francisco

pas un bout de ce monde qui ne porte mon
empreinte digitale
et mon calcanéum sur le dos des gratte-ciel
et ma crasse
dans le scintillement des gemmes!⁴⁵⁾

なぜなら世界の富を支えるのは彼らだからである。いかなる富も彼らの恩恵を受けていないものはない。セゼールは、世界のうちにおける彼ら黒人ディアスポラの果たしている役割がいかに大きいものであるかを示すのである。

しかし、セゼールには、いたる所で同胞の反抗が不当に抑圧され、暴力的に押し潰されているのが見えて来る。そのために、彼には大地が暴力をはらんで「赤く血の色をしている (Terres rouges, terres sanguines ...) ⁴⁶⁾」と感じられるのだ。

そしてセゼールの意識はジュラ山中の独房のなかの一人の瀕死の反逆者に向けられる。

Ce qui est à moi
c'est un homme seul emprisonné de
blanc
c'est un homme seul qui défie les cris
blancs de la mort blanche
(TOUSSAINT, TOUSSAINT
LOUVERTURE)⁴⁷⁾

セゼールは、この黒人英雄 ⁴⁸⁾ の死の場面のイマージュを通して抑圧者白人と反逆者黒人の関係を象徴的にとらえる。トゥッサン・ルーヴェルチュールの独房をとり囲む白い雪は黒人の反逆を押し潰す白人勢力を象徴している。白は圧倒的である。白は黒人の反逆を押し潰すあらゆるものに負わされているイマージュである。白は死となって反逆者のまわりをとびまわり、ついには反逆者は白のなかにうもれてしまう。しかしトゥッサン・ルーヴェルチュールの死によって抑圧者白人は安泰なのではない。彼の死の年、抑圧者白人が彼の部下の手によってハイチから追放された ⁴⁹⁾ ことを知るセゼールにとって、この死は、新たなより大きな爆発の予感を含んだものとしてあるのだ。

la splendeur de ce sang n'éclatera-t-elle point?⁵⁰⁾

黒人ディアスポラのイマージュも、トゥッサン・ルーヴェルチュールの死のイマージュも、共に未来に向かう力の新たな爆発の予感を含んでいる。そしてそれは、散発し腐敗していったバラバラの反逆ではなく、自らの民族を自覚した黒い「血のすばらしさ (la splendeur de ce sang)」の「白い死 (la mort blanche) ⁵¹⁾」に対する全体的な反逆である。それ故にそれは、植民地主義の「マニ教的善悪二元論」の力強い否定を予感させるのである。

かくしてセゼールは「人種を分泌⁵²⁾」しはじめる。彼はヨーロッパによっておしつけられた否定的な——価値の否定によってのみ形容される——自己認識を拒否し、そのような規定を投げ捨てる。そうして彼は、ついに黒人としての自己主張をはじめるのである。彼は、今度は否定によってではなく肯定によって自己を主張する。自己の存在を白人による定義にとらわれずに見出し、表に出そうとするのである。

Des mots?

Ah oui, des mots!⁵³⁾

彼はヨーロッパの言葉で自己について語るが、表現される内容はヨーロッパのものではない。表現されるのは、ヨーロッパがそのように名付けはしても、その名付けられたものそのものの真実を全くおおい得なかった、黒人である彼らの独自の文化のなかにおける認識と行動の様式であるのだ。こうしてセゼールは「正しく美しい白人」の神話を打ち砕く。ヨーロッパが主張する「理性」とは、実は彼ら黒人を似而非精神病理学、似而非心理学、似而非人類学によって劣等人種と規定してヨーロッパの蛮行を正当化する口実をつくり、自らの独断的、独善的価値観によって他の一切の文化を否認した、ひとつの偏見にすぎないのだ。

Ah! mon trésor de salpêtre!

Parce que nous vous haïssons vous et
votre raison, nous nous réclamons de la
démence précoce de la folie flamboyante
du cannibalisme tenace⁵⁴⁾

抑圧者白人の論理であるヨーロッパ的合理性が彼ら黒人の足をすくい、彼らを未来のない穴の中におとし入れるものならば、独自の価値観、独自の文化を主張し、自己を確認しようとするときに彼らが援用するものは、まさしくヨーロッパが「非合理」と呼ぶものに他ならない。彼らはヨーロッパが「早発性痴呆 (la démence précoce)」と呼び「狂気 (la folie)」と呼ぶものによって思考し、表現し、連帯する。しかし、それらは決して真に非合理であるのではない。それは、ただ単にヨー

ヨーロッパの独善的な価値観に合致しないというだけの理由で暴力的に否定されていた、黒人の文化のうちにおけるごく自然な認識の、そして行動の様式なのだ。

しかし、ヨーロッパ理性の拒否の反動でセゼールは行き過ぎ、誤った方向に進んでしまう。植民地主義の「マニ教的善悪二元論」による規定をはねのけることによってそれにとらわれない自己認識に到達するのではなく、同じ枠組みのなかで単純な価値の逆転を行なってしまうのである。すなわち、ヨーロッパが「非合理」と呼んだものの無条件の礼賛を行ない、それ以外の一切を否定してしまうのである。

セゼールは自らのアイデンティティを発見したと信じて叫ぶ。

Qui et quels nous sommes? Admirable question!⁵⁵⁾

それは夢想的に輝くアフリカと自己同一することだ。セゼールは幻想のアフリカに根付く。そして彼のなかにアフリカはひろがり、彼の内部を満たしてゆく。

à force de penser au Congo
je suis devenu un Congo bruissant de
forêts et de fleuves⁵⁶⁾

セゼールはアフリカと一体化し、彼の魂は栄光のアフリカによって満たされ、桃源に遊ぶ。そして、それによって彼の内部では自信と力が芽ばえ、ずんずんと拡大されてゆく。そしてついに、彼はヨーロッパの前に昂然と胸を張ってみせるのだ。

je déclare mes crimes et qu'il n'y a rien à
dire pour ma défense.
Danses. Idoles. Relaps. Moi aussi⁵⁷⁾

セゼールの心は高揚し、ついには分別を失い、この幻想のアフリカのイメージの喚起する神秘性のうちに自らおぼれてしまう。

voum rooh oh

voum rooh oh
à charmer les serpents à conjurer
les morts
voum rooh ho
à contraindre la pluie à contrarier
les raz de marée
voum rooh oh
à empêcher que ne tourne l'ombre
voum rooh ho que mes cieux à moi
s'ouvrent⁵⁸⁾

彼は神秘性のうちに酔い痴れ、異教的な雰囲気、エキゾチスムのうちに自らを見失っている。彼は魔術師となって祈る。彼は幻想のアフリカのうちに黒人の未来を見出そうとして祈るのである。

そして、幻想のアフリカのうちにのみこまれ、その中でそれだけを唯一の価値として礼賛するセゼールにとって、彼らの屈辱の過去は嫌悪感をもってつきはなされるものでしかない。

voum rooh ho
pour que revienne le temps de promission [...]
Mais qui tourne ma voix? qui écorche ma voix? [...]
C'est toi sale haine. C'est toi poids de l'insulte et cent ans de coups de fouet. C'est toi cent ans de ma patience, cent ans de mes soins
juste à ne pas mourir.
rooh oh⁵⁹⁾

これら全ては彼が否定するヨーロッパに属するものである。アフリカにおいて本来すばらしかった筈の自分達の過去に自己同一しているセゼールは、奴隷としての過去をヨーロッパと共に憎しみを持って否定してしまおうとするのである。

そこで彼は、夢幻的に輝くアフリカの名において「世界の終わり (La Fin du monde)⁶⁰⁾」の開始を宣言する。それは全てを解消してくれるだろう。「世界の終わり」とはヨーロッパに支配されたこの世界の全面否定だ。従ってそれは、ヨーロッ

パに対する「偉大な挑戦(le grand défi)⁶¹⁾」だ。そして彼の武器は言葉だ。彼のうちにはアフリカがあるのだから、彼は彼ら黒人を「言葉をもぐもぐつぶやく者にすぎない(que nous sommes des marmonneurs de mots)⁶²⁾」と言うヨーロッパをあざ笑うことが出来る。彼は「生き生きとした血の言葉(des mots de sang frais)⁶³⁾」を持っているのだ。

かくして「世界の終わり」が成し遂げられたあとに来る、彼らだけのすばらしい未来のイマージュはふくれあがる。

C'est moi oh, rien que moi
qui m'assure au chalumeau
les premières gouttes de lait virginal!⁶⁴⁾

しかしついに挫折がやって来るのだ。

Et maintenant un dernier zut:
au soleil (il ne suffit pas à souler
ma tête très forte)
[...]
je lis bien à mon pouls que l'exotisme
n'est pas provende pour moi⁶⁵⁾

歴史性の無視、現実の捨象による飛躍によって獲得されたアイデンティティは結局単なる幻想に過ぎず、強力な抑圧者白人の前では無力である。セゼールは自分の足場を自ら放棄し、彼のものではないエキゾチスムのうちにおぼれることによって自らをあざむいていた。彼は気付かぬうちにヨーロッパの枠組みに従って自己を逆規定していたのである。それ故にヨーロッパは「落ち着きを取り戻し(l'Europe peureuse qui se reprend)⁶⁶⁾」、平然とうそぶくことができる。

(les nègres-sont-tous-les-mêmes, je-vous-le-dis les vices-tous-les-vices,
c'est-moi-qui-vous-le-dis
l'odeur-du-nègre, ça-fait-pousser-la-canne

rappelez-vous-le-vieux-dicton:
battre-un-nègre, c'est le nourrir)⁶⁷⁾

ステレオタイプは無傷で残っているのだ。アフリカの過去の美化とそのなかへの没入、すなわち歴史性の無視、これは致命的である。彼の行為が「マニ教的善悪二元論」の枠組みをそのまま受け継ぐものでしかない限りにおいてヨーロッパは安泰である。得意の絶頂にあったセゼールは軽々と逆手を取られてしまう。黒人独自の価値を担って自己の人間としての尊厳を主張していたセゼールは、今やまるでピエロだ。

autour des rockings-chairs méditant la volupté des rigoises
je tourne, inapaisée pouliche⁶⁸⁾

彼の自己主張は完全に白人の側に取り込まれてしまい、彼の「尊厳はほどのなかをころげまわる(Ma dignité se vautre dans les dégoûtements.)⁶⁹⁾」。そしてようやく彼は了解する。

Mais je me suis adressé au mauvais sorcier.⁷⁰⁾
[...]

Par une inattendue et bienfaisante révolution intérieure, j'ignore
maintenant mes laideurs repoussantes.⁷¹⁾

そして「私の胸のむかつく醜くさ(mes laideurs repoussantes)」とは、セゼールがアフリカの過去を美化しその中におぼれてしまうことによって忘れていた、マルチニックの屈辱の現実のことなのである。

5. 第四の部分——切開手術⁷²⁾

セゼールは自らの過去と現在についての切開手術を行なう。自らを誤らせ、自らを自ら自身から切り離す欺瞞から自由になるために、セゼールは自らを引き裂かねばならない。彼は膿疱を切り開き膿をしぼり出す。

まず過去についての欺瞞が切り取られねばならない。

Non, nous n'avons jamais été amazones du roi du Dahomey, ni princes de Ghana avec huit cents chameaux, ni docteurs à Tombouctou Askia le Grand étant roi, ni architectes de Djénné, ni Madhis, ni guerriers. Nous ne nous sentons pas sous l'aisselle la démangeaison de ceux qui tinrent jadis la lance. Et puisque j'ai juré de ne rien celer de notre histoire (moi qui n'admire rien tant que le mouton broutant son ombre d'après-midi), je veux avouer que nous fûmes de tout temps d'assez piètres laveurs de vaisselle, des cireurs de chaussures sans envergure, mettons les choses au mieux, d'assez consciencieux sorciers et le seul indiscutable record que nous ayons battu est celui d'endurance à la chicotte...⁷³⁾

第三の部分におけるセゼールの失敗は、彼が自らの過去をいつわったことに起因する。今、彼は自らの傷を覆い隠す自己の欺瞞を放棄し、自らの屈辱的な過去を告白する。彼の民族の現在をつくりあげている過去は栄光のアフリカなどではなく、三百年にわたる偉大さのない奴隷としての過去なのであり、彼らはヨーロッパによって人間性を否定され、獣のような生活のなかに沈み込んでいた者達なのだ。

彼はただ歴史を承認するだけではない。奴隷時代の記憶は、民族の集団記憶として彼のうちに受け継がれ、それは今、生々しく甦って来るのだ。

J'entends de la cale monter les malédictions enchaînées, les hoquettements des mourants, le bruit d'un qu'on jette à la mer...⁷⁴⁾

そして、この過去が現在の彼を規定している。力によって人間性を否定されつづけた彼の過去は、彼に「実存の屈折」を押しつけた。セゼールは、現在の彼の実存を歪曲している精神の腫瘍を見つけ出し切り取るために、自己の意識を切り開く。

Et moi, et moi,
moi qui chantais le poing dur
Il faut savoir jusqu'où je poussai la lâcheté.
Un soir dans un tramway en face de moi, un

nègre.⁷⁵⁾

セゼールはパリの地下鉄のなかで一人の黒人を凝視している。その黒人はひとつの悲惨だった。あらゆるものを奪い取られ、もはや生氣さえも色あせている。その黒人の姿のなかには、かつて彼が称揚した栄光のアフリカなど影も形もない。そこにいるのは「リズムも形もない不様なニグロ (un nègre dégingandé sans rythme ni mesure)」でしかない。何故彼はこのように醜いのか。その無様なニグロをつくりあげたのは「貧困」だった、とセゼールは言う。「貧困」の物理的作用によって、彼は客観的に醜くなった、と言うのである。

彼はさらにこの「醜い」ニグロを凝視する

Il était COMIQUE ET LAID,
COMIQUE ET LAID pour sûr.⁷⁷⁾

セゼールは対象を凝視することによって自己の内部に到る。そして彼は自らの卑劣な共犯に気付く。彼の前に座っている黒人が《滑稽で醜い》のは、「貧困」によってつくりあげられた客観的事実などではない。それはセゼール自身が、黒人を黒人であるが故に醜いとした植民地主義による世界のマニ教的分割を承認し、それに加担することによってつくりあげた欺瞞なのだ。

セゼールは、白人の側に身をすり寄せ、こびへつらい、白人の視線によって貫き通されている自分の姿を見出す。彼は、白人のつくりあげた黒人を《滑稽で醜く》見せる偏見のフィルターを喜んで受け入れているのだ。

Ma lâcheté retrouvée!⁷⁸⁾

こうしてセゼールは瞞着がどのようにして行なわれていたかをはっきり理解する。切開手術は終了した。今や彼はありのままの自らの姿を正面から見すえ、ひきうけることができる。

そしてこの承認は、第一の部分におけるような単なる爆発の予感ではなく、さらに明確な未来に向かうエネルギーを生み出すことができる。

(Les balles dans la bouche salive épaisse notre coeur de quotidienne

bassesse éclate les continents rompent la frêle attache des isthmes
des terres sautent suivant la division fatale des fleuves
et le morne qui depuis des siècles retient son cri au-dedans de lui-même,
c'est lui qui à son tour écartèle le silence
et ce peuple vaillance rebondissante
et nos membres vainement disjoints par les plus raffinés supplices
et la vie plus impétueuse jaillissant de ce fumier — comme le corossolier
imprévu parmi la décomposition des fruits du jacquier!)⁷⁹⁾

屈辱的な現状を認めたとき、すでにそれを否定しようとする未来に向かう生命力
がそのなかに芽びているのである。従って、セゼールが自らを「大地に引き倒さ
れた男 (l'homme par terre)⁸⁰⁾」と呼ぶとき、我々が彼の言葉から聞きとるのは、
文字通りのイメージではなく、その否定である。彼は承認し、すでに立ち上がる
うとしている。

Je dis que cela est bien ainsi.

Mon dos exploitera victorieusement la chaliasie des fibres.⁸¹⁾

6. 第五の部分——ネグリチュード⁸²⁾

セゼールはついに自己のアイデンティティを見出す。自己の真の存在の条件を陰
蔽し歪曲する自己欺瞞から自由になることによって、彼は真に自己の民族であるも
のを識別することが出来るのである。その民族とは、この偉大さのない過去と現在
を背負ったマルチニックの黒人同胞に他ならない。彼は、今、その民族の血を自
らのうちに感じ「共通の震えを震える (je tremble maintenant du commun
tremblement)⁸³⁾」。

しかし、このアイデンティティはかつてのように幻想のアフリカを通して獲得さ
れるものではない。それは他ならぬ彼自身のうちに見出されるものである。

Et ces têtards en moi éclos de mon ascendance prodigieuse!⁸⁴⁾

そして、セゼールが自身の内部に見出す彼の民族の姿は、まず負の価値によって

縁どられている。

Ceux qui n'ont inventé ni la poudre ni la boussole
ceux qui n'ont jamais su dompter la vapeur ni l'électricité
ceux qui n'ont exploré ni les mers ni le ciel⁸⁵⁾

確かに彼らはヨーロッパが礼賛するところのテクノロジーは持たない。しかし、そのようなヨーロッパが自己の優越性を主張するために採用する尺度など、セゼールには今やどうでも良い事なのである。彼らのうちには、そのような尺度によって計ることのできないものがある。ヨーロッパが否定によって包み込んでしまう彼らの内部には、実は鬱積したエネルギーの巨大な塊が存在しているのである。

mais ils savent en ses moindres recoins le pays de souffrance⁸⁶⁾

彼らは人間としてある決定的な体験をした者達である。劣等人種として奴隷化され、その人間性を否定された彼らの苦難は、他のいかなる尺度でも計り得るものではない。だからこの苦難こそが彼らの新しい尺度となり、彼らを真に彼らであらしめるのである。彼らの特殊性はまさしくこの苦難のなかにあるのだ。

このことをはっきりと認識したとき、この苦難の記憶は、そのまま未来を背負うべき民族の誇りとなって輝き出す。

par-dessus bord des richesses pérégrines
par-dessus bord mes faussetés authentiques
Mais quel étrange orgueil tout soudain m'illumine?⁸⁷⁾

自らの欺瞞から自由になり、すべての虚飾を投げ捨てた時、一切の束縛を取り払われた革命のエネルギーは、今その真の輝きを輝かせることが出来るのである。

彼の民族のうちからは強烈な光が革命のイメージとなって輝き出している。そして、その爆発的に奔出するイメージは、ある理想の未来の予感となって実を結ぶ。

et toi veuille astre de ton lumineux fondement tirer lémurien du sperme

insondable de l'homme la forme non osée

que le ventre tremblant de la femme porte tel un minerai!⁸⁸⁾

この理想のイメージを自らのうちに帯びることによって、今やセゼールは自らの「ネグリチュード(négritude).」をうたいあげ、自らの民族に祝福をおくることができる。しかし、ここでうたわれるのは、第三の部分においてあったような幻想のアフリカでも黒人の「非合理」でもない。セゼールの意識は、「白人の理性」と「黒人の野蛮」を対立させるヨーロッパによるマニ教的二分割には縛られていない。彼がここで語るのは、そのような外部から与えられた枠組みとは無関係に、彼が自己の民族のうちに見出すことのできる資質についてなのである。それ故に彼は、まず否定形で自らの「ネグリチュード」について語る。

ma négritude n'est pas une pierre, sa surdit   ru  e contre la clameur du jour
ma n  g  ritude n'est pas une taie d'eau morte sur l'oeil mort de la terre
ma n  g  ritude n'est ni une tour ni une cath  drale⁸⁹⁾

セゼールのネグリチュードは、可視的だが表層で石化し、その内なる生命力を失なったヨーロッパ的価値とは本質的に異なったものだ、と彼は言う。彼が語りたいのは黒人文化や黒人文明についてではない。彼のネグリチュードは、彼の民族のうちにある未来に向かおうとするエネルギーのことなのだ。

elle plonge dans la chair rouge du sol
elle plonge dans la chair ardente du ciel
elle troue l'accablement opaque de sa droite patience.⁹⁰⁾

それは忍耐の果ての「半透明の意気消沈 (l'accablement opaque de sa droite patience)」を穿つことのできる力である。そしてさらに、数世紀にわたる苦難を通じて彼らの感性の奥く深くで醸造され、伝えつづけられ、今ここにセゼールが民族の内部に見出せる徳――「祖先から受け継いだ徳 (vertus ancestrales)⁹¹⁾」である。そしてその徳とは次のようなものである。

mais ils s'abandonnent, saisis, à l'essence de toute chose
ignorants des surfaces mais saisis par le mouvement de toute chose
insoucieux de dompter, mais jouant le jeu du monde⁹²⁾

彼らは「苦難の国を知り (mais ils savent en ses moindres recoins le pays de souffrance)⁹³⁾」, 「万物の本質に感動する (mais ils s'abandonnent, saisis, à l'essence de toute chose)」が故に、真に人間的な未来をもたらし得る者達だ。セゼールは、そのような彼の民族の資質をうたいあげる。

véritablement les fils aînés du monde
poreux à tous les souffles du monde
aire fraternelle de tous les souffles du monde
lit sans drain de toutes les eaux du monde
étincelle du feu sacré du monde
chair de la chair du monde palpitant du mouvement même du monde!⁹⁴⁾

かくして世界の未来を担う者としての自己のアイデンティティを見出したセゼールのうちで、情熱は激しく脈打つ。

Sang! Sang! tout notre sang ému par le coeur mâle du soleil⁹⁵⁾

そして、この「太陽の雄々しい心臓 (le coeur mâle du soleil)」を持つことが出来たセゼールは、今やその理想を人類愛にまで高めることが出来る。

Eia pour la joie
Eia pour l'amour
Eia pour la douleur aux pis de larmes réincarnées.⁹⁶⁾

こうして自らのアイデンティティを見出し、それを通して理想のイメージにま

で到ることのできたセゼールは、自らの場所であるマルチニックから、同胞と共に未来を建設してゆこうと決意する。

et voici au bout de ce petit matin ma prière virile que je n'entende ni les rires ni les cris, les yeux fixés sur cette ville que je prophétise, belle,⁹⁷⁾

彼は民族の指導者となるであろう。セゼールは、自らが引き受けるべき使命を祈りのかたちで自己に言い聞かせる。彼は自らの民族の過去、現在、未来の全てを引き受けねばならない。

Faites-moi commissaire de son sang
faites-moi dépositaire de son ressentiment
faites de moi un homme de terminaison
faites de moi un homme d'initiation
faites de moi un homme de recueillement
mais faites aussi de moi un homme d'ensemencement

faites de moi l'exécuteur de ces oeuvres hautes
voici le temps de se ceindre les reins comme un vaillant homme —⁹⁸⁾

自己の民族の全てを引き受けるセゼールの「私(moi)」は、この時、集団的広がりを持ち、自らの民族と渾然一体となっている。豊かな愛に満たされたセゼールのうちにあるのは、もはや恨みなどではない。彼が自らの民族、そして人種のうちに身を没するのは、白人に復讐するためでも、あるいは覇を唱えるためでもない。今や彼の眼中にあるのは実現されるべき真に人間的な未来のイメージだけであり、彼のうちにあるのはそのような未来に対する使命感だけなのである。セゼールは次のように言っている。

Mais les faisant, mon coeur, préservez-moi de toute haine
ne faites point de moi cet homme de haine pour qui je n'ai que haine
car pour me cantonner en cette unique race
vous savez pourtant mon amour tyrannique

vous savez que ce n'est point par haine des autres races
que je m'exige bêcheur de cette unique race
que ce que je veux
c'est pour la faim universelle
pour la soif universelle
la sommer libre enfin
de produire de son intimité close
la succulence des fruits.⁹⁹⁾

これにつづいて現れる、荒れ狂う海上を行くカヌーの力強い前進のイメージは、セゼールの感じている、そのような世界の未来に対する使命感が生み出したものには他ならない。

7. 第六の部分——根付くこと¹⁰⁰⁾

使命感の高揚が高みにまで達すると、セゼールは再び自己の内部にある集団的記憶のうちにかがみ込み、奴隷としての過去を想起する。

「真に世界の長男 (véritablement les fils aînés du monde)¹⁰¹⁾」たる自己の民族の資質を見出し、その民族を通して自らの思想を人類愛にまで高め得たセゼールは、もはや何の屈折もなく自らの傷を眺めることができる。

Tenez je ne suis plus qu'un homme, aucune dégradation, aucun crachat
ne le conturbe, je ne suis plus qu'un homme qui accepte n'ayant plus
de colère
(il n'a plus dans le coeur que de l'amour immense, et qui brûle)

J'accepte... J'accepte... entièrement, sans réserve...¹⁰²⁾

ここでは、セゼールは自らすすんで自らの民族の過去とこの現実に同意を与える。これは地に根付くことである。樹木が大地にしっかりと根をおろし、根付くことによって枝をひろげ天に向かってのびてゆくように、彼の思想は、そのうちに重い過去をかかえる彼の民族の集団的記憶のうちに根をおろすことによって、そこから革

命のエネルギーをすい上げ、前進する力となることが出来るのである。

まず記憶のうちに甦ってくるのは、奴隷としての自分達の姿、泥まみれの過去である。彼が確認するのは、彼らが人種故に奴隷化されたという事実、そして獣のように扱われ、そうして生きてきたという事実である。ばらばらの断片的なイメージは、総合されてひとつのイメージをかたちづくる。

Ramper dans les boues. S'arc-bouter dans le gras de la boue. Porter.
Sol de boue. Horizon de boue. Ciel de boue.

Morts de boue ô noms à réchauffer dans la paume d'un souffle
fiévreux!¹⁰³⁾

そしてその悲惨のなかで無名の死を死んでいった者達がいる。セゼールは彼らの死を決して忘れないだろう。

Présences je ne ferai pas avec le monde ma paix sur votre dos.¹⁰⁴⁾

彼らの苦難は、彼らの死によって突然ゼロに還元されてしまったわけではない。それはセゼールの受け継いだ集団的記憶のなかで「実在」しつづける。彼らの苦難もセゼールの思想のうちに引き受けられるだろう。

さらにセゼールは、第一の部分で描写されたアンティル諸島のこの現実をも受け入れる。彼は、その孕む爆発のイメージも同時に受け入れる。従って、彼が受け入れる現実、すでに未来に向けての、解放に向けての運動を内包している。

Iles tronçons côte à côte fichés sur l'épée flambée du Soleil
Raison rétive tu ne m'empêcheras pas de lancer absurde sur les eaux au
gré des courants de ma soif
votre forme, îles difformes,
votre fin, mon défi.¹⁰⁵⁾

そして、彼が受け入れる屈辱的なニグロの姿のなかにも、主体性、すなわち「頭骸指数や血漿やら体物質などではもはやなく、苦難のコンパスで計られたネグリュード (la négritude, non plus un indice céphalique, ou un plasma, ou un

soma, mais mesurée au compas de la souffrance)¹⁰⁶⁾」が広がっているのである。

8. 第七の部分——上昇¹⁰⁷⁾

根付くことによってたくわえられた革命のエネルギーは、今、爆発する。

Et voici soudain que force et vie m'assaillent comme un taureau et l'onde de vie circonvient la papille du morne, et voilà toutes les veines et veinules qui s'affairent au sang neuf et l'énorme poumon des cyclones qui respire et le feu thésaurisé des volcans et le gigantesque pouls sismique qui bat maintenant la mesure d'un corps vivant en mon ferme embrasement.¹⁰⁸⁾

革命のイマージュは沸騰する。それは未来を建設しようとする彼の情熱であり、力強い「生命の波 (l'onde de vie)」である。第一の部分において予感された爆発、大浄化は今ここに実現されるのである。

Et nous sommes debout maintenant, mon pays et moi, les cheveux dans le vent, ma main petite maintenant dans son poing énorme¹⁰⁹⁾

自らの人間としての条件を引き受け、新しい建設すべき未来の理想を見出しているセゼールの意識は、誇りに満ち、マルチニクの黒人同胞を率いてのびあがってゆく。セゼールのうちを満たすのは、真に人間的な未来の理想をそのうちに抱いてマルチニクの地獄から世界に向けて上昇してゆくネグリチュードのイマージュである。

人間解放の正当勢力であるネグリチュードを滞びたセゼールは、それまで彼らの頭上で彼らから不当に未来を奪っていたヨーロッパの詭弁を、のびあがりながら乗り越えてゆく。それは「人間の仕事はもう終わった (que l'oeuvre de l'homme est finie)¹¹⁰⁾」とか、彼ら黒人には「この世界で何もすることがない (que nous n'avons rien à faire au monde)¹¹¹⁾」などと言っていたヨーロッパの「嘘 (mensonges)¹¹²⁾」である。そして彼は、世界の未来を建設するための真に正当な哲学を示すのである。

mais l'oeuvre de l'homme vient seulement de commencer
et il reste à l'homme à conquérir toute interdiction immobilisée aux
coins de sa ferveur
et aucune race ne possède le monopole de la beauté, de l'intelligence,
de la force¹¹³⁾

さらにセゼールは、黒人存在を未来のない穴のなかにおとし入れる、黒人自身の誤った態度をも乗り越える。それは「自分達は二級の書記であるようにしてニグロであると考えている者達 (ceux qui considèrent que l'on est nègre comme commis de seconde classe)¹¹⁴⁾」、すなわち、黒人の劣等性を主張する思想に他ならない同化の思想を受け入れ、白人のまねをすることによって白人と同じ人間として白人に認めてもらおうとする者達の、黒人としての主体性の放棄であり、さらに「良いニグロ (un bon nègre)¹¹⁵⁾」、すなわち、自らの劣等性を信じ込まされ、それに何の疑問も抱かなかった者達の、白人による役割期待の無批判な受け入れである。

セゼールはそれらを力強く乗り越える。

Je dis hurrah! La vieille négritude progressivement se cadavérise¹¹⁶⁾

そしてこれらを乗り越えることによって、彼がマルチニックを蘇らせるために探していた「人間の心臓 (Et je cherche pour mon pays non des coeurs de datte, mais des coeurs d'hommes)¹¹⁷⁾」、すなわち未来を目指す真正のネグリチュードは、今、水平線から噴出し、世界の表面におどり出す。

Et elle est debout la négraïlle

la négraïlle assise
inattendument debout
debout dans la cale
debout dans les cabines
debout sur le pont
debout dans le vent

debout sous le soleil
debout dans le sang

debout
et
libre¹¹⁸⁾

こうして世界の表面にすくくと立ったネグリチュードは、もはやいかなるものにも惑わされず自らの道を前進する。セゼールのイマージュのうちには、真に解放された黒人の姿がある。

そして時はもはや「暁」ではない。セゼールのイマージュのなかでは、新しい世界の太陽が「発芽しつつある (le soleil bourgeonnant)¹¹⁹⁾」のである。そして「浄めの船 (le navire lustral)¹²⁰⁾」を進めるセゼールは、世界に向けて未来の建設を呼びかける。

écoute épervier qui tiens les clefs de l'orient
[...]
écoute squalle qui veille sur l'occident

écoutez chien blanc du nord, serpent noir du midi qui achevez le
ceinturon du ciel
Il y a encore une mer à traverser
oh encore une mer à traverser¹²¹⁾

「人間の仕事は今やっと始まったところ (mais l'oeuvre de l'homme vient seulement de commencer)¹²²⁾」なのだ。そしてダンスを踊るセゼールの姿は世界の人間の解放のたたかいを導くネグリチュードのイマージュである。彼は「真に世界の長男たる者」であるからである。

la danse il-est-beau-et-bon-et-légitime-d'être-nègre
A moi mes danses et saute le soleil sur la raquette de mes
mains¹²³⁾

爆発的な革命のエネルギーを身中に滞りて上昇するセゼールの意識は、さらに高度な段階に達する。

mais non l'inégal soleil ne me suffit plus
enroule-toi, vent, autour de ma
nouvelle croissance
pose-toi sur mes doigts mesurés
je te livre ma conscience et son rythme de chair
[...]
je te livre mes paroles abruptes
dévore et enroule-toi
et t'enroulant embrasse-moi d'un plus vaste frisson
embrasse-moi jusqu'au nous furieux
embrasse, embrasse NOUS¹²⁴⁾

セゼールは、ネグリチュードのなかに身を没することによってこの革命のエネルギーを爆発させ、ネグリチュードを通して人間の解放をうたってきた。しかし、彼が自らの思想を一般的な被抑圧者解放の思想として展開させず、自らの民族と人種の独自の運命に基いてその思想を展開させてきたのは、彼らが一般的な人間として抑圧される者となったのではなく、ヨーロッパの詭弁によって劣等人種として規定された上で奴隷化され植民地化された者達だからなのであり、今や「新しく成長した」、真に解放された彼らであるならば、歴史の新しい段階のなかで彼らのネグリチュードは必然的に解消されてゆかなければならない。「風 (vent)」とは全世界の人間の解放の思想であり、その究極の思想に彼はネグリチュードを「ゆだねる (je te livre)」のである。ここにあらわれる「我々 (nous)」、そして強調された大文字の「我々 (NOUS)」とは、もはや人種にはとらわれない、全世界の被抑圧人民の連帯である。究極にまで到達したネグリチュードは全世界の被抑圧人民との連帯にうち震える。そしてそのうち震える連帯のイメージは、そこから生み出されるべき新しい未来のイメージとなって上昇する。その時セゼールのネグリチュードは「星々の投げ縄で締め殺され (puis, m'étranglant de son lasso d'étoiles)¹²⁵⁾」、一切人種による差別の存在しない未来のイメージのなかに解消されてゆくのであ

る。

Colombe

monte

monte

monte

Je te suis, imprimée en mon ancestrale cornée
blanche.

monte lécheur de ciel

et le grand trou noir où je voulais me noyer

l'autre lune

c'est là que je veux pêcher maintenant la

langue maléfique de la nuit en son immobile

verrison!¹²⁶⁾

「大きな黒い穴 (le grand trou noir)」とは、セゼールがそのなかに身を没することによって革命のエネルギーを引き出したネグリチュードのことであり、上昇し、はるか高みから見おろすセゼールの意識には、それは対象化されたものとしてしか映らないのである。

しかし最後の3行が、セゼールの、彼の生きるこの現実のなかでの選択を示している。セゼールは、詩の世界において彼のイマージュが到達した異例の高みにおいてはネグリチュードの普遍的思想のうちへの解消を予見したが、この長詩における彼の意識の歩みが示す通り、この現実のうちに生きるセゼールにとってはネグリチュードへの沈潜は不可避の選択なのである。「今 (maintenant)」、すなわち、ペンを置き、詩の世界を閉じる時——それは同時に現実の時間のなかで「今」を再び生き始めるときだが——セゼールは、再びネグリチュードを宣するのである。

〔おわりに〕

この長詩において、マルチニクの現実の悲惨から出発したセゼールは、ネグリチュードの意識に至るために、自らを誤らせた欺瞞を切り開く必要があった。それは、自らの同胞の生きる現実を全面的に引き受けることを不可能とする同化知識人

としての彼自身の自己疎外を克服することであった。サルトルはセゼールの意識の歩みをエウリディケを求めるオルフェの歩みになぞらえたが、¹²⁷⁾セゼールはサルトルが言うように「後ずさりしながら自己に立ち戻」ったのではなく、目をそらすことによって神話をつくりあげようとした自己の欺瞞を直視し克服することによって、解放された自己意識に到達しているのである。従ってセゼールのネグリチュードは「大文字のアフリカ文化」を主張するものではない。それは、マルチニックに生きる黒人の現実を媒介として、この現実を止揚するために生み出される解放の思想なのである。

さらに、セゼールはネグリチュードの意識に到達したこの詩において、すでにネグリチュードの解消を予見している。このことは、セゼールにおいては、ネグリチュードは不可避の過程ではあっても人種の属性として刻みつけられたものなのではなく、植民地主義の軛のもとにある黒人が自らの現実を止揚するために通過しなければならないひとつの段階としてとらえられていることを示している。

こうして明るみに出されたセゼールのネグリチュードは、『祖国復帰ノート』が発表されたのと同じ年、つまり1939年にサンゴールが語ったネグリチュードと鋭く対立する。サンゴールは言っている。

Sensibilité émotive. L'émotion est nègre, comme la raison hellène.¹²⁸⁾

黒人種の神話としてつくり上げられてゆくサンゴールのネグリチュードは、すでに人種的特性について語っているのである。しかし、二人のネグリチュードを対比することは本稿での目的ではなかった。サンゴールにおけるネグリチュードの意識を明らかにし、その相違を検討することは、我々の次の課題である。

註

Césaire のテキストはすべて、Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Présence Africaine, 1971. による。テキストからの引用はページ数のみを記す。

- 1) 『祖国復帰ノート(*Cahier d'un retour au pays natal*)』は、1939年8月、パリの雑誌 *Volontés* に掲載され、その後1947年に Bordas からアンドレ・ブル

ドンの序文と共に出版された。

- 2) Frantz Fanon, *les damnés de la terre*, François Maspero, 1968., p. 142.
- 3) Léopold Sédar Senghor, *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*, Presses Universitaires de France, 1964.
- 4) サルトル全集第十巻『シチュアションⅢ』収録の「黒いオルフェ」, 鈴木道彦・海老坂武訳, 人文書院, 1964.
- 5) イデオロギーとしてのネグリチュードに対する批判は数多くの著者たちによってなされている。その主要なものをいくつかあげておく。

Marcien Towa, *Léopold Sédar Senghor, Négritude ou Servitude*, Yaoundé, Éditions CLÉ, 1971.

Stanislas Adotevi, *Négritude et négrologue*, 10/18, 1972.

Amilcar Cabral, « La culture nationale » in *Unité et Lutte*, François Maspero, 1975.

Yves Benot, *Indépendances Africaines*, François Maspero, 1975.

Abdoulaye Ly, *Feu La Négritude*, Dakar, Éditions Xamle, 1982.

- 6) セゼールは、1971年12月、ネグリチュードについて次のように語っている。

Je refuse absolument une espèce de pan-négrisme idyllique à force de confusionisme : je frémis, moi, de penser que je pourrais être confondu au nom de la négritude... je ne veux pas du tout que la négritude devienne un immense agrégat où Dieu seul reconnaîtra les siens, je refuse moi, de me considérer, au nom de la négritude, le frère de Monsieur François Duvalier, pour ne citer que les morts, et d'autres sinistres personnages qui me font dresser les cheveux sur la tête! Même au nom de la négritude, je considère que nous n'avons rien à faire ensemble. (L. Kesteloot et B. Kotchy, *Aimé Césaire, l'Homme et l'Œuvre*, Présence Africaine, 1973.)

- 7) サルトル全集第八巻『劇作集, 恭々しき娼婦』収録の「恭々しき娼婦」, 芥川比呂志訳, 人文書院, 1952, p.185.
- 8) « le monde colonial est un monde manichéiste. » (Frantz Fanon, op. cit. p. 10.
- 9) フランツ・ファノン, 『地に呪われたる者』, 鈴木道彦・浦野花子訳, みすず書房, 1969, p.120.

- 10) いわゆる同化政策 (politique d'assimilation) である。これについては, Jean Suret-Canale, *Afrique Noire: L'Ère coloniale, 1900-45*, Éditions Sociales, 1962., pp. 111-116 参照
- 11) フランツ・ファノン, 『黒い皮膚・白い仮面』, 海老坂武・加藤晴久訳, みすず書房, 1970, p.77.
- 12) p.29.
- 13) ibid.
- 14) ibid.
- 15) ibid.
- 16) pp.31-57.
- 17) p.31
- 18) ibid.
- 19) p.33.
- 20) p.39.
- 21) pp.39-41.
- 22) pp.49-51.
- 23) pp.53-55.
- 24) p.35
- 25) p.31
- 26) pp.55-57.
- 27) p.37.
- 28) p.41.
- 29) p.45.
- 30) pp.57-65.
- 31) p.57.
- 32) ibid.
- 33) p.59.
- 34) ibid.
- 35) ibid.
- 36) p.61.
- 37) ibid.
- 38) p.63

- 39) 『黒い皮膚・白い仮面』, op. cit. p.79.
- 40) p.63.
- 41) 『黒い皮膚・白い仮面』, op. cit. 収録のフランシス・ジャンソンの「序」,
p. 8.
- 42) p.65.
- 43) pp.65－97.
- 44) pp.65－67.
- 45) Toussant-Louverture に率いられ、白人支配者を追放した、18世紀末の黒人
奴隷の反乱を指す。註 48, 49 参照。
- 46) p.69.
- 47) ibid.
- 48) Toussant-Louverture (1743－1803), フランス大革命直後の1791年、ハイチ
において黒人奴隷の反乱を率い、1800年に独立を宣言した。しかし、1802年、
ナポレオンの派遣した軍隊に虜えられ、フランスのジュラ山中の牢獄で獄死し
た。ハイチの独立については註 49 参照。
- 49) 1803年、Toussant-Louverture の部下 Dessalines によってフランス軍は打ち
破られ、Dessalines はハイチの独立を宣言した。Toussant-Louverture とハイ
チの独立については、Aimé Césaire, *Toussant-Louverture, Présence
Africaine*, 1981. 参照。
- 50) p.71.
- 51) p.69.
- 52) 『黒い皮膚、白い仮面』, op. cit. p.84.
- 53) p.73.
- 54) ibid.
- 55) p.75.
- 56) ibid.
- 57) p.77.
- 58) p.79.
- 59) pp.81－83.
- 60) p.83.
- 61) p.85.
- 62) ibid.

- 63) p. 83.
- 64) p. 89.
- 65) *ibid.*
- 66) p. 91.
- 67) *ibid.*
- 68) p. 93.
- 69) *ibid.*
- 70) *ibid.*
- 71) p. 95.
- 72) pp. 97—109.
- 73) pp. 97—99
- 74) p. 99
- 75) p. 101.
- 76) p. 103.
- 77) p. 105.
- 78) *ibid.*
- 79) p. 107.
- 80) p. 109.
- 81) p. 109.
- 82) pp. 109—127.
- 83) p. 109.
- 84) p. 111.
- 85) *ibid.*
- 86) *ibid.*
- 87) *ibid.*
- 88) p. 115.
- 89) p. 117.
- 90) *ibid.*
- 91) p. 119.
- 92) p. 117.
- 93) p. 111.
- 94) p. 119.

- 95) *ibid.*
- 96) p. 121.
- 97) *ibid.*
- 98) p. 123.
- 99) pp. 123 — 125.
- 100) pp. 129 — 137.
- 101) p. 119.
- 102) p. 129.
- 103) p. 131.
- 104) p. 133.
- 105) p. 135.
- 106) p. 137.
- 107) pp. 137 — 155.
- 108) pp. 137 — 139.
- 109) p. 139.
- 110) *ibid.*
- 111) *ibid.*
- 112) *ibid.*
- 113) *ibid.*
- 114) p. 143.
- 115) *ibid.*
- 116) p. 147.
- 117) p. 141.
- 118) pp. 147 — 149.
- 119) p. 151.
- 120) p. 149.
- 121) p. 151.
- 122) p. 139.
- 123) p. 153.
- 124) *ibid.*
- 125) p. 155.
- 126) *ibid.*

127) 「黒いオルフェ」, op. cit.

128) Léopold Sédar Senghor, «Ce que l'homme noir apporte » in *Liberté I, Négritude et l'humanisme*, Le Seuil, 1964., p24.